

# 毎日新聞 年年歳歳

○ご近所の話

平成 26 年 9 月 28 日

ご近所はありますか。

私は大阪の下町で育ちました。子供がたくさんいて、路地を走り回っていました。その脇では、いつでもおばさんが立ち話。どのお家も一様に豊かではなく、困ったときにはおかずの融通もしていました。そして、世話焼きのおばさんもいました。プライバシーの考えはあまりなく、家庭の事情というものも、みんなが知っていました。当然、お年寄りや認知症のかたも、その地域の一員として溶け込んでいました。こうして、ご近所がかたちづくれ、その中で、子供は大きくなり、お年寄りは寿命を全うしていきました。

最近、国の施策で地域包括ケアシステムの構築というのが提唱されています。2025年になると超高齢化社会を迎えます。そのような中で、高齢者や認知症の方が住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるようにしようというものです。各自治体でもすでに取り組みを始めています。難しい言葉で言うと、医療、介護、介護予防、生活支援、住まいの5つのサービスをまとめて提供できる仕組みを作っていこうとしています。

なんのことはない、簡単な言葉にすると、ご近所があればいいのだと思います。時代は変わり、家族の単位が小さくなり、一人暮らしの高齢者が増えています。昔のようなご近所がない、世話焼きのおばさんがいない地域が増えてきました。このままではきっと不幸な方が出てきます。そのために、自治体が高齢者や認知症の方を地域で見守る体制を作ろうとしています。

私どもの姫路市医師会でも取り組みを行っています。地域包括ケアシステムには医療と介護の問題は欠かせません。このたび、姫路市とともに医療介護連携会議を立ち上げました。市内の医療と介護に関わる21団体が参加して、様々なことを解決していくつもりです。

会議の打ち合わせのために、参加していただくことになった各団体を一カ所ずつ訪問しました。特に、介護関連の団体を訪れたときは、子供の頃にあった社会見学のように、新鮮であり、興味深いものがありました。我々医師は実は介護のことについては詳しくなく、多くのことを教えていただきました。そして気づいたことが一つ。介護の関連の方はどなたも笑顔がすばらしく、ニコニコして高齢者や認知症や障害者のことを語っておられました。

当地でも、きっと、すばらしい地域包括ケアシステム、言い換えればご近所

を作っていけるものと考えております。

私事ですが、過日に母を見送りました。大阪の地に永く住み続けておりました。姫路にバリアフリーの二世帯住宅を建てたのですが、とうとうやってきませんでした。顔見知りの方と離れたくないからでした。ご近所ごと移住してもらえたら、よかったです。さすがにそれは無理。母にとって、ご近所はそれほど大切なものでした。